

すぎなみ大人塾西荻コース

ぷらっと西荻パート3 くらしサイズアップ 2019 チャレンジ

西荻で学びと遊びを生かす人(全6回連続講座)

第2回 学び・遊びの共生「多文化共生がうまれるまち」

2019年10月19日(土) 午後1時30分から4時30分

於 東京女子大学

学習支援者：学びの案内人 船尾 本

講師：東京女子大学大学院生 胡怡(こい)さん「多文化共生意識調査結果」

東京女子大学 松尾 慎教授 & 授業履修生(多文化コミュニケーションデザイン専攻等)

司会 多田さん：本日は東京女子大学が開催場所となっています。出席者はすぎなみ大人塾西荻コースの受講生、東京女子大学の学生さん、それに本日のみ参加の帝京大学の学生さんです。まずは、今日の講座ガイダンスについて、船尾さんから説明をお願いします。

講座ガイダンス

船尾さん：学びの案内人の船尾です。すごい参加人数で皆さんの発言の時間が足りないのではと心配しています。今日初めて参加される方は、今日までに出来上がっているゆるやかな活動チームに参加して頂きます。去年は、地域の課題を見つけてチームを作りましたが、今年は先に友達を作って、その後チームを作ってもらい、そのチームの中で考え議論して頂く。今日新しく入られた方は各チームのいろいろな課題に、意見を言って議論して頂ければと思います。また、毎回ゲストをお呼びして、地域の課題をお話ししてもらっています。一回目は、地域福祉について杉並区社会福祉協議会の中島篤さんが、その後、大人塾の活動としてときめきサロンについて種岡祐子さんがお話をしました。今日はユニークなつながりで仲間同士と話をしたり、人に教わったり人に提案したりを楽しんで頂けたらと思っています。

東京女子大学 松尾慎教授

テーマ「多文化共生が生まれるまち」

松尾教授：松尾です。今日ご参加の帝京大学の学生さん5人は、救急救命士の資格を取るために学ばれています。指導教授が(受講生の)岩崎隆先生です。今日は午前中、東京女子大(以下東女大)の学生にAEDの使い方を講習した後参加して下さっています。

調査結果について

胡怡さん：東京女子大学大学院 2 年、現在日本語・日本語教育分野の胡怡と申します。今年で東女大に来てから 6 年目になります。ずっと松尾先生のもとで日本語教育について学んでいます。毎週日曜日、松尾先生のもとでミャンマー難民の方々とともに日本語活動を一緒にしています。どうぞよろしくお願い致します。

松尾教授：私は基本的に日本語教育を教えています。2009 年に東女大に入るまで、様々な国でかなり長い年月、日本語教育に関わりました。ここで教員をしながら多文化社会コーディネーターという認定を受けて、ワークショップなどいろいろな事に関わっています。難民活動の他に、群馬県太田市にある子供たちの為のポルトガル語教室を東女大の学生と共にサポートしたり、色々なことを大学の外でやっている人間です。今日の流れですが、まず胡怡さんの発表の後、事実確認の質問を受け付けたいと思います。その後、胡怡さんの発表を受けてのグループ活動を私のファシリテーションで行います。

お手元の資料は出来れば先に読まないで、パワーポイントに出来る限り集中して頂いた方がいいと思います。胡怡さんの発表のペースに合わせてお手元の資料を参考にしてください。では、胡怡さん、お願いします。

胡怡さん：私のテーマは『外国籍住民との共生するホスト住民の意識、杉並区における質問紙調査を基に』です。研究のきっかけは、大学 1 年生の時に松尾先生が担当している日本語 I という留学生の授業です。教科書を開いて日本語の文法や読解などを勉強するばかりでなくて、西荻という地域について調べる事や地域の方々との交流を中心にした内容です。当時、私は初めて西荻というまちに出て、西荻のイベント情報を知らせる西荻案内所にも取材しに行きました。(現在は SNS などで情報発信のみ)。それから先生の授業を通して、地域の方々との繋がり、地域イベントにも多く関わるようになりました。去年の大人塾西荻コースにも参加して貴重な経験をさせて頂きました。それから、去年の 10 月に杉並区を元気なまちにしようという「まちビタ会議」にも参加しました。これは、西荻

で行われた地域おこしのイベントで、まちの方が地域の多文化共生について『地域共生社会の実現のために私たちができる事』というテーマで話をされました。その中で、様々な対象、例えば、高齢者、障がい者、子どもなどの役割等を紹介したのですが、外国籍住民の事については一言も触れていませんでした。

た。こういった地域の様々なイベントに参加して、地域のホスト住民は外国籍住民との共生意識が強くないという印象を受けました。外国にルーツを持つ人々がより十全に社会参加できるようになるには、受け入れ側であるホスト住民も外国籍住民との共生意識を持つことが必要だと私は考えました。

今年の1月27日に私と他の2人の留学生が、一住民として、地域のコミュニティスペースで外国籍住民と互いに知り合って異文化交流をはかる「地球人交流パーティー」というワークショップを行いました。このワークショップにはおよそ20人参加してくれました。サイコロを振って出た目に書いてあるトピックについて話し合いながら自己紹介をしました。それから5年後西荻にどのようなまちになって欲しいのか、グループに分かれて話し合いながら様々なアイデアを出しました。このワークショップを通して、普段外国籍住民が地域のイベントに参加した時にお客さんとして参加することが多いのですけれども、今回は自分自身が企画側として関わることに意味があると強く感じました。それから、なぜタイトルを地球人にしたかという、国籍などに関係なく地域住民の一員として対等に対話し、関わり合いながら共に暮らしていくことを目指すからです。

このワークショップの参加・企画と同時に、杉並区のホスト住民が外国籍住民に対してどのような共生意識を持っているのかを明らかにしたいと思って質問紙調査を実施しました。ここでは、ホスト住民とは日本国籍を持っていて、日本に住んでいる人たちとします。本日は、この質問紙調査の結果について皆さんに報告していきます。

まずは日本全体の人口と外国人数を見てみましょう。現在日本の人口は約1億2620万人です。在留外国人数は約273万人、これは日本の総人口の約2.16%を占めています。この数は過去最高で一年で6.6%増えました。続きまして、東京都23区の在留外国人率は、この表を見て分かるように、1位は新宿区で約4万人、2位は豊島区、3位は荒川区となっています。杉並区は21位で約1万6千人、2.9%でした。少ないと思われるかもしれませんが、この数は日本の全体の平均の2.16%よりは多いです。

杉並区の国籍識別在留外国人数を見てみましょう。この2つの表を見て分かる通り、この5年間杉並区では外国人率が増えており、2014年と比べると、ネパール人とベトナム人が多く増えてきているとわかります。ネパール人の割合が増えてきている理由のひとつと考えられるのは、杉並区ではエベレストインタ

一ナショナルスクールというネパール人学校があるからです。この学校は 2013 年に阿佐谷に設立され、去年荻窪に移りました。現在、幼稚園児から中学 3 年生まで 200 人近い児童、生徒が勉強しています。以上のような背景やきっかけを踏まえて、近年日本では外国籍住民の増加に伴い、受け入れ側であるホスト住民が外国籍住民とどのように共生していくのかが重要な課題となっています。

今回、私の研究は松尾先生が行った研究事例を参考にして分析を行いました。松尾先生は香川県西讃地域に在住するホスト住民を対象に外国籍住民との共生意識に関する質問紙調査を実施しました。

松尾先生はこの 5 つの項目を基にアンケート調査分析を行いました。

1. 外国籍住民との接触機会の有無
2. 外国籍住民の居住の増加および技能実習生に対する認知度
3. 支援に対する意識
4. 居住に対する心理的抵抗感
5. 習慣言語に関する同化的意識

私も、この 5 つの分析項目をベースにしてアンケート調査を行いました。松尾先生は香川県で技能実習生に対する認知度調査にしたのですが、杉並区には技能実習生がほとんどいないと思われるので、外国籍生徒のための学校があるので、技能実習生を外国籍生徒のための学校に対する認知度に変えました。

調査の概要について説明致します。2019 年 4 月から 6 月まで、杉並区に在住、在勤、在学の高校生以上のホスト住民を対象に外国籍住民との共生に関する質問紙調査を実施し、216 名の協力者より回答を頂きました。性別は女性が 120 名で男性が 88 名となっています。年齢の構成はこのようになっています。次に調査結果を見てみましょう。

① 外国籍住民の居住の割合が高くなったか

そう思う、ややそう思う、を合わせて、76.7%になっています。つまり調査協力者の 7 割以上が、外国籍住民の増加を認知していると分かります。

② 外国籍生徒のための学校の認知度について

杉並区ではエベレストインターナショナルスクールというネパール人学校があるのを知っている人の割合は 4 割弱で、その学校の生徒の主な出身国や地域を知っている人の割合は 3 割弱となっています。つまり、外国籍住民の

増加を認識していても外国籍生徒のための学校への認知度がそれ程高くないと分かります。

③ 外国籍住民に対する心理的抵抗感について

まずは今後、外国籍住民がさらに増加していく傾向について、抵抗がある、強い抵抗がある、を合わせて14.8%となっています。それから、外国籍住民が近所に住むという事について、抵抗がある、強い抵抗がある、を合わせて10.5%となっています。

④ 家族が外国人に介護を受けることについて

抵抗がある、強い抵抗がある、を合わせて14.8%となっています。外国籍住民に対する心理的抵抗感がそれほど高くないと分かります。

⑤ 外国籍住民との接触機会

会ったときに挨拶し合う外国籍住民について、約4割いるとの結果でした。

⑥ 町内会や自治会活動を共にする外国籍住民、困った時に助け合う外国籍住民について

約1割前後しかいないとの結果でした。さらに、町内会や自治会活動を共にする外国籍住民について、分からないと回答したのは約3割との結果でした。つまり、会ったときに挨拶を交わす外国籍住民がいても、ともに町内会や自治会活動をしたり、何かあった際に外国籍住民と助け合える関係を構築したりする外国籍住民は、極めて少ないことがわかります。外国籍住民に対する心理的抵抗感がそれほど高くないけれども、実際には外国籍住民との接触機会がそれほど多くないこともわかります。

⑦ 支援に対する意識について

見知らぬ外国人に対する支援行動に対する支援活動についてです。

状況説明：あなたは、駅にいます。日本語ができないように見える外国人が迷って、困っているようです。あなたは、少し時間があります。その外国人を助けようと試みますか。ためらいなく試みる、少し不安があるが試みる、助けたいが不安があるので試みない、助けようとは思わない、この問いに対して、助けを試みると回答したのは、7割以上となっています。つまり、見知らぬ外国人に対する支援行動の意識が高いと分かります。

⑧ 年代と支援行動の関係の結果

年代が上がるにつれて外国人に対する支援行動の意識が高くなると分かります。それから、10代と20代は、試みると回答したのは48%となっていて一番少ないのです。どうしてこの数字が出ていると思いますか。

⑨ ボランティア活動の参加意思の有無について、

仕事や家事、勉強に差しさわりのない程度なら、外国籍住民のためにボランティア活動をしてみたいと思うか。そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない、この問いに対して、そう思う、ややそう思う、を合わせて8割以上との結果でした。つまり、外国籍住民のためのボランティア活動に対する関心はかなり高いと分かります。

⑩ 年代とボランティア活動の参加意思の有無との関係

これは、先程の見知らぬ外国人に対する支援行動の意識の結果と逆で、10代と20代はそう思うが90%となっていて、外国籍住民のためのボランティア活動に対する関心が一番高いと分かります。どうしてこのような結果になったと思われますか。

⑪ 習慣・言語に関する意識について

公教育の場における外国人の習慣に関する意識について

ブラジルでは女の子が赤ちゃんの頃からピアスをする習慣があります。ブラジル人の子供がピアスをつけて日本の学校に入学してきました。先生は『学校の規則に従ってピアスを外してください』と言いました。あなたは先生の発言に賛成しますか。賛成する、やや賛成する、あまり賛成しない、賛成しない、この問いに対して先生の発言にあまり賛成しない、賛成しないを合わせて7割以上となっています。つまり、外国人の習慣を認める意識が高いと分かります。

⑫ 外国籍住民の敬語使用に関する意識について

あなたの市、区に住んでいる外国籍の人が以下のように言っています。『私の国の言葉には敬語がありません。敬語を話すと自分でない気がするので、使いたくありません。』普段も初対面や目上の人に対して普通体（ため口）を混ぜながら話しています。この人は敬語を使うべきだと思いますか。そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない、外国籍住民は敬語を使うべきだ、については、そう思う、ややそう思うを合わせて54.7%となっています。つまり、外国籍住民に敬語使用を求める回答が半数を上回って外国籍住民に敬語使用を求める意識が強い傾向がみられました。また、この質問項目については回答した理由を書き添えていただきました。

今回は、敬語使用を求める理由を3つ取り上げます。

- ◎敬語に対する固定的観念について。例えば、「敬語は日本の文化だと思うから」「日本の言葉に敬語などの言葉があることを知らせていく」などがありました。このように、敬語そのものに対して固定的観念を持った回答が特徴的でした。
- ◎外国籍住民にとってのメリットについて。「日本で生活するうえで敬語を使わなければ悪い印象を持たれてしまうことがあるから」、「日本に住んでいく上で人間関係を構築するためには必要だ」、などがありました。このように外国籍住民にとってメリットを持った回答が特徴的でした。
- ◎日本社会への同化的要因が、理由として最も多かったです。例えば「郷に入れば郷に従え」、「日本の文化理解も少しは必要だと思う」、「ここは日本だから」など日本への同化的要因を持った回答が特徴的でした。

以上の結果になりました。この後、ぜひ皆さんからコメントを頂けたら嬉しいです。これで私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

松尾教授：今の話聞いてどう感じたか簡単にシェアしてもらっていいですか。共有の時間を取った後、質問を受け付けます。

グループディスカッション

事実確認のための質疑応答

質問者：外国人と言っても例えば欧米系だとかアジア系だとか、地域的な違いがあるのかどうか、差異がある事があればお聞きしたいなと思いました。

胡怡さん：私はこの調査を行った時には外国籍住民の国籍を考えず、日本に在住する外国籍住民としました。

松尾教授：逆に皆さんは、このアンケートに答えるとしたらどういう外国人を想定されるか、という事ですよ。

質問者：習慣・言語に関する意識の項についてですが、学校の規則がピアス禁止なので規則を守りなさいと先生は言ったのですね、ところがブラジルでは子どもがピアスをつける習慣がある。日本の学校にブラジルの人が入ってきた時に、学校は規則を変えていないわけですよ。ダメって、外してくださいと言

っちゃいけないのであれば、規則を変えないと成り立たない。先生の立場から考えると、学校にはそれぞれ規則があるのだから、それを守らせるのが先生の仕事だし、それが善とされているのであればそうしなきゃいけない。賛成しない立場の人から見ると、規則は規則だけれど、ピアスが風俗・習慣に類する事ならばそういう発言が出てきたこと自身、不思議という意見もでる。そのあたりをどのように分析されているのか教えてください。

胡怡さん：日本の学校ではピアスをつけてはいけないですけれども、ブラジルではこのようにピアスをつける。小さい頃から女の子がピアスをつけるのは自分の親とか家族からもらい、すごく大切にしたい気持ちがあつてのことです。多分日本の学校の先生やクラスメート、私たちには、ブラジル人が自分の子どもにつけるピアスの大切な意味を分らないと思う。先生に、このピアスを外してくださいと言われた時に、ブラジル人の生徒がこれは実はすごく私の大切なものですという理由を説明したら、学校の先生、クラスメートにちょっと理解してあげる気持ちがあつて欲しいなあとは思いました。

松尾教授：胡怡さんはそう思うけれど皆さんはどう思うかっていう調査ですね。規則があるのだから規則通りにするというのも考え方です。また、規則があるけど、この運用で何とかできる、と考えている人はピアスをつけたままでよい。このように、「人間の生活には選択肢の幅がある」という文化の多様性についての質疑になります。

質問者：私は視覚障害1級なのでお顔とか見えないのですが、アンケートにお答えをする方の中に、障害を持った方がいらっしゃったら、どんな障害で、どのような困った事があるのか、と考えるのです。障害を持った外国人で日本に来て困るっていう事は、当然あると思う。日本国内で、様々な施設等はバリアフリーになっていると言いますが、まだまだ不十分です。外国人の方が来られた時に、プラスして障害があつたりすると厳しい部分があつたりするかと思う。アンケートの中でその対象になられた方で障害をお持ちの方がいらっしゃったら、どんな障害だったのか教えて頂ければと思います。

胡怡さん：今回の調査では、対象の方はいらっしゃらなかったのですが、でもさっきおっしゃったように多文化の共生を考える時に、外国籍住民だけではなくて障害者だったりLGBTの方だったり、色んな対象を含めて考える必要があると私は考えました。

松尾教授：東日本大震災の時は聴覚障害の方、健常者の被災率をみると、聴覚障害の方は、耳が聞こえる方の約2倍の死亡率だった、津波の影響ですね。

質問者：ラグビーのワールドカップで選手や関係者が来日しますが、タトゥーを派手にいれておられる方もいます。日本では入れ墨っていうとその方のイメージが悪くなる。ラグビーのワールドカップの選手の方はファッションとか自分の信条で、亡くなったお母さんの事を思って入れるなど、そういった文化があるような気がします。入れ墨がどこまで、インターナショナルスタンダードになっていくのかが、日本にも問われている部分だなと思いました。胡怡さんは、入れ墨という文化はお国（中国）にはないと思うのですけれども、どう思われますか。

胡怡さん：入れ墨を入れるか、入れないかは、その方自身の自由です。もし自分が入れ墨をしたいならしてもいい。他の人にはどういう風に見られるのか、他人の目が気になるのかどうか、その人自身の判断です。私たちができるのは、その方をまずは最初に否定するのではなくて、向きあいながら、その人の感じ方、文化とか理解する必要はあると私は思います。

質問者：例えば、選挙の投票に行く際に、入れ墨をしている人には投票しない人が多いようです。そういうことが今日本ではあるようで、その辺はあまりインターナショナルスタンダードじゃないなと思うこともありますし、自分でも答えが出ない。

胡怡さん：これは日本のひとつの課題、これから私たちが考えていく課題だと思います。

松尾教授：来年はオリンピックもあって、入れ墨の問題は色々検討されているようですが、ここで話題提供をして、皆さんに考えて頂こうと思います。

胡怡さんの最後の発表、敬語使用についての自由記述です。郷に入れば郷に従え系の答えが結構多かった。それがどうだったかっていう判断は色々あると思うのですが、私が思ったのは、「郷に入れば郷に従え」、の、「郷」を構成している人たちはいったい誰なのだ、という問題です。それと、何に従って何に従わなくていいかという事が気になったのです。

ラグビーの話が出ましたが、日本代表チームを見るといったいこの人達はどこで生まれた人なのか、さっぱりわからない。けど日本代表ですよ。

リーチ・マイケル選手や、この近くに住んでいて、この間病院で会ったロバー

ト・キャンベルさん、また日本国籍を選択された大坂なおみさん。あと朝鮮人学校の生徒さんも日本生まれでしょうね。ロバート・キャンベルさんは、ここにいる人よりずっと日本文化や日本文学については専門だと思いますが、これらの人たちは「郷」を構成している人たちなのか、従う立場の人なのか、どちらでしょうか。

さて、次の中で従うべきことは何でしょうか。

- A. ゴミ出しのルールを守ること
- B. 学校の規則でダメならピアスをしないこと
- C. 漢字の読み書きを含めた日本語能力を習得すること
- D. 高齢者や妊娠している人に電車やバスなどで席を譲ること
- E. 駅で困っている外国人らしい人に声をかけること、

A から E まで 5 つ設定してみました。当たり前だと思うものもあるかもしれませんが、そもそも郷に入れば郷に従え、の「従え」の項目はどれなのだという事ですね。この項目を無視して頂いてもいいので、さっきの対話を深めていってください。

グループディスカッション

松尾教授：初めに申し上げておいたと思うのですが、胡怡さんの発表やグループ活動をふまえて何か言いたいことある人、手を挙げてもらって一分以内で好きなことを話してください。それ以上話したい人は、終わった後で。じゃ、手を挙げて下さい。

参加者：郷に入っては郷に従えと言っている件ですが、自分が外国に行った時に、自分の行動はどうなのか、と。自分が従おうと思っている程度のところまでは、来た人にも守ってやって欲しいよねっていう風に思うのは自然なことと思う。逆に自分が外国に行って全然努力しないくせに、ちょっとでも違う事を目くじら立てていたら、人としてどうか、と思いました。守るべきルールの部分とマナーの部分について、ルール等に該当するところは守っていく。

参加者：外国人から見て、日本人のイメージってあると思う。この人、日本人なのになんでこんなことが出来ないのって思うケースってあると思う。実は、視覚障害の場合も障害者っていうのは、個人が問われることはなく「障害」と

して問われるケースって多いのです。例えば日本で最初に全盲弁護士になった竹下義樹さん、81年に司法試験に合格するまで8年かかっています。すぐ合格したのではなくて、受験運動して認められたからです。その時にこの人はすごいなっていうイメージがある。ところが、私ができないと、何で出来ないの、と私が問われているのでなくて、視覚障害者は出来ないという風に言われてしまう。それは障害者にとって辛いことで、皆が問われるから皆に問われないようにしなきゃいけないっていう辛さを持ちながら生きていかなきゃいけない。個人として、出来ない人もいる、出来る人もいるって事をまず認識してもらう必要があると思います。

参加者（学生）：アンケート調査で、見知らぬ外国人が困っていた時に助けを試みるのが、年代が上昇するにつれて高くなる、という結果が出ていて、私はこれをすごく意外だと思いました。グループで何でこの結果が出たかを話し合った時に、西荻大人塾の方々にもアンケートをしたから、という意見が出て、でもそれは多分こういう大人塾というコミュニティがあるからこそ、問題意識が出るなあって思ったので、それはすごくいいことだと思いました。

松尾教授：ありがとうございます。話を先に進めます。

多文化共生の主体は誰なのか、について情報提供します。全ての住民が主人公だと思いますし、主人公がどういう人であっても主人公です。当たり前ですよ、今皆さん対話なさっていたと思いますけど、対話を重ねていく中で、当然人は変わっていきます。ここにいる全員、皆私も含めて。そうすると当然社会を変えていくきっかけになるっていう風に私は信じていますし、皆さんもおそらく信じていらっしゃるから、このコースに参加なさっているのかなあと思います。

多文化共生社会における日本語という観点で、情報提供します。（パワーポイントの文字を指さして）皆さん、これをぱっと読める人いますか。これ、タイ語が出てきます。皆さんがバンコクあたりに駐在などをする時、まあおそらく日本語と英語かで仕事ができると思います。もしタイ語の世界に入れられたら、これ分からないですよ。内容は小学校の入学予定者の通知です。こういうものを皆さん子どもさんと一緒にタイに行って受け取って、読んでもわからないから子どもは学校に行けない、これは現実には起こっていることです。

日本では、修学旅行説明会のお知らせなんていうものも、日本在住の外国人の親は日本の学校からもらうわけですね、外国人の子どものお母さんはそもそも母国に修学旅行って存在しないっていうことがいっぱいあるわけです。

やさしい日本語って最近耳にするようになったと思うのですが、NHKのニュースウェブサイト（「NEWS WEB EASY」）という、やさしい仮名がふったりしてある、普通のニュースをやさしくしたウェブニュースがあります。

<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

「皆さん、高台に避難してください。」これ、やさしいでしょうか。自分が日本語を勉強している立場になってください。どこが難しいですか。高台は？、避難は？ 避難も結構難しいです。これを「高いところへ逃げてください」と言えば理解度合いがぐっと上がり、命が助かる可能性が高まります。

皆さんの近くにまだ日本語が十分じゃない人がいて、緊急の時には「危険」と言わないで「危ないです」、「避難が必要です」と言わないで、「逃げてください」、「子どもはどこにいますか」、「いませんか」とか、具体的な感じですね。

「伝えるウェブ」について(無料、やさしい日本語)

仮名をつけたり、絵文字をつけてウェブで発信している人がいます。これが100%分かりやすいかどうかは分かりませんが、努力して発信している人が少しいます。

やさしい日本語のほか、いろんな外国語による多言語の発信も必要です。私には3・11の時、自分が被災しながらも、夜に多言語情報をFMで流していた友人がいます。両方大切なのですが、私たちがとりあえず出来るのはやさしい日本語ですよ。

こんな本も出ています。岩波新書 「やさしい日本語」 著者は庵（いおり）巧雄さん、私の仲間です。

弘前大学の先生のページ。有名です。

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/>

休憩時間の後、船尾さんのお話に引き続き、東京女子大学の学生の企画案を少しだけ発表させていただきます。

休憩

今日やること

船尾さん：講座の最終日（1月18日）、皆さんがまとめられた活動を発表する会を設けようと思っている。女子大の方は、出来ればまた次回以降も参加して頂いて何か形になるものを発表できるようになってくれればいいと思っています。チームで試行錯誤するという事になるので、ゆるいチームが出来ます。それが自分の興味を満たすものどうか分からない場合は、自由に席を変わって頂いても構いません。それぐらい、ゆるいチームです。人に教わるとか人に話すとか、人と協力するっていう事を体験してもらいたいです。チームの成果発表は完全でなくてもいい。今年は、ちょっと愛嬌で発表することで良いと考えています。松尾教授から出た「やさしい」の言葉の意味。リーダーの方は特に発想をやわらかくして欲しい。（資料に）優秀なリーダーはいらないと書きましたが、優秀なリーダーがいても結構。でも、出来れば優しいリーダーであったり、人の話を聞くリーダーであって欲しいし、それって面白いよねっていう風にやってもらいたい。それからリスク、色々な問題が出てきます。それは発言した人の問題ではなくて、全体の問題と思ってとらえてください。さっきの共生社会の話ですけど、相手がいる事によって、共生社会が出来上がるわけですよ。

意見をどうしても最後まで、詰めて、詰めて…でないと出来ないのではなくて、面白い事でも小さい事でもやってみよう、動いてみようっていうのがすごく大事です。それから、チームの中で、始めは目的を決めてないですから、自分の役割がわからないかもしれないですけど、話していくうちに自分は何をすればいいのか分かるし目的も明確になる。必然的に決まってきます。お手伝いをするだけでも、意見を言うだけでもいいです。ポスターを作るだけでもいいです。そういう活動も始まりの1歩です。自分の役割を果たしてください。テーマについて大事なのは、「それって楽しいよね」「それって何かいい事が生まれるよね」っていう風に考えてもらいたいです。「ちょっとここおかしいって思いますよ」…こんな事を気付かれるともっといいですね。ただ楽しいだけでは進まない、何か課題を克服して続けていくところに持続性が出るのです。さっき話を聞いたところでは、仮のチームで、もう会合をやっているところがある。何をやっているのか知りませんが。

- ◎優秀なリーダーは要らない
- ◎仲間とのリスクは楽しい
- ◎意見一致を頑張るよりやってみる

例えばこれは「西荻みなみ」で実際に起きたことです。「子ども食堂って西荻みなみに出来ないの？」と、テーマが出てきた。子どもたちに朝ご飯を食べさせたい、でも厨房がないから無理だよとか、朝起きてやるのは大変だよとか、色々課題の方が先にどんどん出てくるのです。そこで、テーマについて、感じる課題を自由に話してみることをお勧めします。そのうちに、課題がたくさん出たけれど、このままで話し合いをやめるのはおかしい？ 解決の方法はなにか？ このような展開になるのかと考えます。

朝日新聞の記事ですが、子どもの朝ご飯を、手間暇の問題も安全性の問題も色々解決できる、と小学校でやっているケースがあります。

もうひとつ、日本橋の老舗でだしバーをやっているところがあります。だしをカップで売るとこれが結構売れるのです。こんな掛け算をする。みそ汁バーって出来ないかな？ 朝早くやる必要もなければ、経費も掛からないだろうし、色んなバリエーションも作れるだろうし、夜にみそ汁バーを出してもいい。子どもだけが相手じゃなくて、大人も、独身や、一人暮らしもいるでしょうし、色んな地域を繋げる力が出来るのではないか。もし各地域にみそ汁バーを作ってみたら、逆にどんな課題が出てきて、どんな人たちが来て、どんな風に仕組みが作れるだろうと考えていった方が、すぐスタートできると考えました。最近、西荻みなみのパーティーでは、結構みそ汁が出るようになった。そういう事が習慣になって、話が動いて行って、最終的には子ども食堂みたいな事が出来ればいいですけど。

自分達で出来る事は何かって考える、子ども食堂をやるっていったら大変、でもその入り口は何かってたくさんあるので、それを考えて頂きたい。ですから、今日の打ち合わせで、大体の方向性と大体こんな簡単な事がやれるよねっていうところまで持って行って頂きたい。そういう事で、後は多田さんにお任せして。皆さんでチームになってもらって。

多田さん：先程、松尾先生からありましたけども、授業の発表をここで。

東京女子大学生からの発表

松尾教授：今年新しく多文化コミュニケーションデザインという授業プログラムを作りました。受講学生が30名程度いるのですが、昨日の授業で、この学期で何かやる、何か企画して実施する、それだけの、ゆるいのです。昨日学生と話した成果を少し大人塾と関係があると思うので、お時間頂きました。

学生さん：はじめまして。私たちは今、多文化コミュニケーションデザインという授業で、大人塾の方々から西荻の課題点を聞き、それを踏まえて西荻を盛り上げるための企画を考えています。昨日の授業では、課題を出した学生がそれぞれの自分の企画案を考えてきて、皆で話し合う授業を持ちました。

ターゲットは5つありまして、東京女子大学の学生、私も韓国から参りましたけれども、私のような外国人とシニア層並びに若者、子育て世代と一人暮らしの方たち、西荻窪に住んでいる方たちです。

スタンプラリーとか探検型のマップを作ってみんなと楽しみながら多文化コミュニケーションをとれるような企画、カフェとか料理教室などの食に関する企画、イベント、演劇、バザーなどの企画案も考えております。

西荻窪の再発見とか、学びとか、学びを通して色々な方々と触れ合うという事を目標にしたいと思っております。全てを出来るとは思っていないので、さらに企画やターゲットを1つか2つに絞って、2つくらいのチームに分かれて、これから企画を考えていきたいです。これからの授業でもっと詳しい話し合いをしていけたらと思っております。私たちの発表は以上です。ありがとうございました。

松尾教授：少し補足させてください。この授業はこの授業で独立していて、大人塾は当然大人塾で独立しているのですが、これらの学生が大人塾の皆さんと何かやるのかどうかを考えるのは、当然彼女たちの自由です。もしこの学生たちと組んで何かやりたい大人塾の方がいたら、ぜひ引き込んでやってください。それも彼女たちが自分で選択すること。12月21日にまたここ（東京女子大）で開催しますが、その時にこの学生たちが何をやったのか、少し発表させて頂く時間を持たせて頂きます。

グループワーク

船尾さん：各グループ間を自由に移動できる時間を設けました。自分たちがやりたい事を決めたら自由に取材したり、裏どりみたいな事をしてください。新しくグループに入った人は遠慮なく、取材状況などを知っている人に聞いてみてください。各自が持っている情報・話も公開しながら、こんな事出来たらいいよねって事を話してもらいたいと思っております。テーマとかタイトルとか、提案内容を修正しながら企画をまとめていくので、チームの中で自分の役割を発見していくのを見せてください。西荻で楽しい提案が出来るような案を期待しております。

多田さん：では、前回の 5 チームに分かれて頂きたいと思います。前回欠席された初めての方にわかるよう、これから各リーダーに短く説明して頂きます。

リーダー 1：テーマは『東女／若者と一緒に西荻を考える会』

西荻には商店街が 30 余、町内会もいっぱいあります。東女大の学生さんの活動は、授業、部活それから VERA（ベラ）祭をやっていて、何となく西荻のまちとつながっていないのでは…という思いがスタートラインにあります。若者がいなくなるまちは必ず滅びます。活動のアイデアをぜひ東女大の学生さんたちに提供して欲しいと思っている。例えば、西荻にふさわしいスイーツと一緒に作るとか、新しい西荻のシンボルマークを作るとか。居酒屋の風神亭がもうすぐ廃業する、アイスクリーム屋のぼぼりも閉店です。経営者が歳をとってくると廃業という現実が横にある。ぜひ若い力と一緒に西荻を盛り上げる何かを企画したいと考えています。東女大の方には「書を捨ててまちに出ましょう」。まちにはいろんな事がありますよという事を言いたいです。

リーダー 2：『アート、まち、子ども』

アートで何かしたいと言ったところ、まちと子どもについても一緒にやりたいて人たちにも集まって頂きました。「アート、まち、子ども」と 3 つのキーワードがありますが、まだ何も決まっていません。アートと言ってもかなり幅が広いと思うので、色んな可能性があるのかなと思っている。何か面白い事が出来ればいいなあと思っています。

リーダー 3：『西荻街歩きのグループ』

ご存じのように西荻には素敵な店がいっぱいあって、骨董通りも風情がありますね。何より新渡戸稲造氏が初代学長を務めた東京女子大学もあります。ここから北に行きますと善福寺池のところは源頼朝公が掘った井戸があります。普段皆さんが通り過ぎているようなところに、ものすごい歴史があったりとか、有名人が絡んでいたとかいう事があります。そういうものを皆さんと一緒に再発見したいと思いますのでぜひ我がチームに加わって頂ければと思います。

リーダー 4：『ユニバーサルデザインチームで、五感を体験する』

五感のまち歩きという事で、西荻の五感を考えてみます。①視覚は西荻から富士山が見える、インスタ映えするとか、②西荻の色をまち歩き、例えば白でしたら、東女の本館、それから、和菓子屋さんの四店舗の白衣が白とかですね、茶色だったら、レトロの喫茶店、坂の上のケヤキ公園とか、あとは烏骨鶏の卵の茶色、黄色は、夜だと伏見通り、モリヤハチミツ、たつみ木材。赤は、井草八幡の大鳥居、ピンクの象、花であれば酔芙蓉、③聴覚に関しては、西荻の音を聞くという事で、西荻の音を相当録ってきてまして、例えば休日の善福寺公園のボートを漕ぐ音とか、井草八幡の柏手とか、だいたい 100 以上録ってきました。あと、夕焼けこやけとか、すぎ丸の桃井第四小学校だとか、障がい者でも楽しめるようなまち歩きを考えております。④嗅覚は、レトロ喫茶のコーヒーの香り、たつみ木材の木の香り、古本屋の大人の本の香り、銭湯の消毒の匂いとかですね。その他⑤触覚に関しては、トロールの彫刻の森。五感と商品開発、五感で感じるものをやりたいです。

リーダー5：『西荻音まちチーム』

私たちの問題意識の出発点のひとつは、阿佐谷にはジャズ（阿佐谷ジャズストリート）があり、荻窪にはクラシック音楽祭（荻窪音楽祭）がある。西荻にはないねという問題意識が出発で、すでに2回も打ち合わせを重ねています。目指すものは、音楽祭よりも、もうちょっと西荻の音効果みたいなものを西荻のアイデンティティにしたい。つまり、音楽も含めた音のない静かなところも音だと、そういう事も含めて、もう一回それを出発点として、西荻の新たな価値、魅力を考えてみたい、と思っています。それで、チーム「西荻おとまち」、としました。2月までに、西荻音資源マップを作り、我々の成果をまとめていこうと考えています。今西荻で歌声喫茶が流行っていて三軒くらいある。ライブハウスも三軒歩いて、観てきました。実際、見て体験して、そしてそれを西荻の音資源であると考え。それを音マップという形でまとめたい。野鳥が聞こえる公園とか、視覚障がい者が外歩きの目印になる音とか、外国人の好きな音スポットとか、皆さんの感性や日頃の生活感からそれをマップに落とし込む、そしてそれを最終的には西荻を音で和ませる。音散歩です。

多田さん：初参加の方はどこに入るか迷うと思いますが、4時を目途に決めてください。すでにグループに入っている方も、グループを変わっても、もちろんOKです。よろしくお願いします。

各チームで発表シート②に記入

全体共有

『西荻チーム音まちリーダー』

活動テーマ、キャッチフレーズは未定です。西荻の地域資源を新たな視点から掘り起こしていきたい。提携先は各合唱団とかコーラスの会の方々。教育委員会主催にしたい。公立中学校、小学校のコーラス部の数、活動内容を調べたいと思っております。商店街に対してもお店の BGM はどうなっているか、など、徹底的に西荻の音環境を調べてみたいと思います。物とか形ではない、目に見えないけれど、西荻の皆さんに脈々と伝わっている粋とは言いませんが、西荻山の手のまさに神髓を次の世代に伝えていく。その一つの方法として音楽、音を通じてやっていきたいと思っております。地域の行政、商店街、学校を含めて一緒に西荻おとまつりと言うか、荻窪のクラシック音楽祭、阿佐谷のジャズに負けないものを実現出来たらいいと思っております。

お母さんが台所で歌う料理の歌があってもいい。シリーズとして西荻に残すべきものを探そうと思っております。善福寺川沿いに沿って子どもたちが帰る時に皆、一緒に歌っていますよね。コンクリートの塀と土手ですが、川の響きが癒しだから歌っているのでは…思っています。生活と暮らしの中でも、音文化を愛することによって日常の生活と暮らしがサイズアップしていく一助になればと思っています。

『チーム UD(ユニバーサルデザイン) リーダー (UD) 』

UD はユニバーサルデザインの略称です。活動テーマは、ユニバーサルデザインで五感を体験していく切り口です。台風、地震などで、障がい者の方、日本語が分からない方はどうやって対応をしたらいいか分からない事があります。手書きで西荻のマップに防災対応情報を、どこに何があるかも含めて五感情報を記載するつもりです。例えば耳で聞いて音でも分かるような事も合わせて考えていきたい、アイデアはいっぱい出ております。

『西荻まち歩きチーム リーダー』

本日は東女大の学生さんから「西荻のまちをそんなに知らない」「だから西荻をもっと知りたい、そして再発見したい」何を知りたいかを皆さんに聞いてみたらいろいろな意見が出ました。具体的には防災施設や AED がある場所、お店の開店・廃業・移転等、ハザードマップを詳しく読み込みたい等です。タイミング良く、今度の 10 月 22 日 (火)、防災まち歩きのイベントがあるのでぜひ参加

して情報をつかみたいとの事でした。まち歩きのプランを作るにあたってすごく重要なのは、普段は皆が通り過ぎる所に、こういうものがある、という発見です。チームの英知を合わせて、皆がピックアップして無数のスポットをつなぐようなコースをぜひ設計していきたいと思います。チーム名は未定です。

『アート、まち、子どもチーム』

アート、まち、子どもをキーワードに何をやりたいかを皆で話し合い、地域の子どもたちや通りすがりの方々に、何か楽しんでもらえるようなイベントをやりたい、という事になりました。西荻アート縁日、縁日風にアートのワークショップブースがあり、それぞれのブースでいくつか楽しめるようなイベントを開催出来たら、と話しています。これから具体的な内容、会場、費用などについて詰めていけたらと思っています。大きな紙芝居を作りたい、西荻のまちの壁に絵を描いてみたい、子どもたちにポスターを作らせてみたい、即興演劇を子どもたちと一緒にやってみみたいなど、色々な案があります。

『東女／若者と一緒に西荻を考える会（仮）』

学生の方を含めた色んな意見が出ていて、固まっていない。切り口は西荻、それから学生と一緒にやる、という事ですが、切り口を決めるのは学生にしてもらおうかなとも考えています。大人塾の私たちはサポーターにまわり、リーダーも学生にやってもらおうかなと思っている。

本日の振り返り

船尾さん：話し合いは面白かったですか。次回の打ち合わせを課外授業としてやろうという人たちもいる、楽しくやってもらえればいいと思います。さっき音楽祭の話がありましたが、来年の1月の18日(第5回目)、会場である高四小に音楽祭の話をしてみたらいかがでしょうか。道でいろんなイベントをやるのも、西荻全部は大変でも神明通りだけだったら出来る。アートと子どもと音楽祭、地域をくぐれば、可能な事が出てくる。全体でやるのは大変ですけど、この地域だけなじんでみようとか、駅前だけやってみようとか、そうすれば出来る。それから女子大生の企画へおんぶに抱っこは卑怯だな。新しいアイデアが学生さんから出ましたか？ 松尾教授が昨日やった講座の中身に関係してくるのだろうと思いますけど、具体的な例では、科学遊びとか、子どもと何か出来る、など具体的なアイデアがないとなかなか追いつめられない。今日は去年の（講座の）進み方からいうと、すごく早く具体的な内容になりました。今日は大雑

把で、何も決まっていなくていいのです。次はそれを少し詰めていった内容をはっきりさせていきたいなと思っています。具体的に当たっていった、ひとつでもふたつでも確実なものをつまえてください。ここで告知があります。

学生：3年松尾ゼミに所属しております。本日は素敵な会に参加させて頂きありがとうございます。私たちはゼミ活動の一環として、11月16日（土）、東京都主催の多文化共生プレゼンコンテストに参加します。参加にあたって、10月22日（火）、ゼミ生とまち歩きの人たちに協力して頂いて防災まち歩きを行います。気になる方がいらっしゃいましたら、私たちにお声かけください。このコンテストは、東京都の多文化共生がテーマで、私たちはゼミ活動の一環として夏休みにゼミ合宿で仙台に行き、そこで防災について学んだ事を生かし、東京都の多文化共生を防災と絡めてプレゼンしようと考えています。活動内容や詳細は後日フィードバックできたらと思っています。お時間頂きありがとうございます。

松尾教授：防災まち歩きは、多田さん、高橋ゆかりさんにもお世話になりました。12月の第4回講座には、私もまた来ます。皆さんの活動がぐぐぐっと進んでいくといいなと思っていますし、全ての皆さんのグループの活動、興味深いと思ったので、イベントをするときはぜひお声かけ下さい。サポーターの誰かに伝えて頂ければ私に伝わるので、知っている限りの学生に伝えます。学生を巻き込んでいい企画を立てて頂きたいと思います。今日は本当にありがとうございました。